

小川洋子の前期作品にみる文学的兆候

——『博士の愛した数式』に継承されたもの——

大出 裕華

一 はじめに

小川洋子『博士の愛した数式』^①の初出は新潮社の雑誌『新潮』二〇〇三年七月号であり、翌年、第五回読売文学賞、第一回本屋大賞を受賞している。先行研究では小川洋子の転換点^②とされている本作に描かれているのは、記憶障害のある数学者の老人とその家政婦、家政婦の息子、三者の「思いやりにあふれた」^③交流の様相である。特に、〈老人〉と〈子ども〉の関係性に注目するならば後年の作品群にも類型が見られる。ところが、本作以前には〈老人〉と少年・少女（『ホテル・アイリス』^④『沈黙博物館』^⑤など、十代後半）の交流はあっても、〈子ども〉（小学生までを想定）と関係性を育むものは一切ない。

『博士の愛した数式』より前の作品群を前期、以降を後期と仮定した場合に、そもそも前期六三作の内では主要人物としての〈子ども〉自体が少ない。視点人物が〈子ども〉である『美少女コンテスト』・『キリコさんの失敗』^⑥、回想中に主に登場する『刺

繡する少女』^⑦『失踪者たちの王国』・『バックストローク』^⑧のみが該当する。それが、当作になって突如として〈子ども〉に焦点が当てられている。

ここに、語られたもの・語られなかったものの差異を読むことができるはずだ。本論では『博士の愛した数式』を、前期を踏まえて生み出された一つの到達点とみなし、『博士の愛した数式』などに託されたであろう、前期作品から読みとれるいくつかの文学的兆候について論証を重ねていく。なお、物語作品のテクストを基準とし、随筆・対談などに論拠は極力置かないことを前提とする次第である。

さて、明晰夢を見たことがあるだろうか。夢であることを自覚しながら見ていた、もしくは夢を見ているにも関わらず現実だと思いついていた経験はあるだろうか。明晰夢ではない夢を仮に「非現実」と呼ぶとしよう。この場合、明晰夢は「現実」と「非現実」のあわいに位置する。そもそも、夢の中の「非現実」は私たちの生活する「現実」ではないというだけで、実際に存在しな

いとは言いきれない面がある。ただ「現実」の〈私〉の生きる世界とは異なるというだけであり、多元宇宙的な考えからすれば、「非現実」もまたどこか別の並行世界では「現実」かもしれない。小川洋子の作品群において、物語世界の始点を視点人物にとつての「現実」とみなした時、展開される物語は明晰夢のようなあわいに位置することが多い。注意しておきたいが、必ずしも視点人物が明晰夢を見ているわけではなく、「現実」と「非現実」の境界上に立たされていたり、それらを行き来できる存在であったりする、という意味合いである。

物語の主軸となり、かつ「非現実」的な空間といえは『完璧な病室』¹⁴で弟の入院する病室、『ホテル・アイリス』¹⁵の翻訳家が住む邸宅、『貴婦人Aの蘇生』¹⁶のアナスタシアが暮らす猛獣館などが例に挙げられる。小川作品の中では住空間が「非現実」やあわいとして機能するのは通例であると言える。

これに併せて、すでに亡くなった他者との交流を回想して綴っている点が三作には共通している。「(前略) 視点人物としての一人称の女性、その他の登場人物としての老人や子供、理系の男性、不在の夫という偏りだけを見るならば、さぞかしワンパターンな小さな世界の繰り返しと思うかもしれない」という伊藤の指摘にもあるように、小川作品には共通項が多く見受けられる。次節では(1)病の患い、(2)食への忌避感、(3)淡白な性的表現、(4)モラトリアム状態、(5)近親者の死、(6)他者の偶像視、などについて、先行論を参照しながら確認していきたい。

二 前期作品にあらわれた共通項

(1) 病の患いに関しては紹介するまでもなく、小川作品に通底する題材である。本項は障碍と病気を、先天的・後天的、外的疾患・内的疾患、治療の可否に関わらずまとめて「病」として括る。身体的欠損と精神的欠損はいずれも「欠損」という点において類似であり、また「能力の限定」¹⁸という意味で同種のものとなせることを念頭に置きたい。

作中に症名こそ明言されないが、初期作品に見られる認知症や躁うつ病といった内的疾患から、『シュガータイム』¹⁹(低身長症の弟)・『妊娠カレンダー』²⁰(生まれてくる赤子への示唆)以降に出現してくる身体的欠損²¹にいたるまで、その症例は多種多様である。

こういった傾向は作者の持つ偏愛の対象と受けとめることは容易だが、マージナル(境界にあるさま・ごく小さい)な世界を描く上で有用な、必須にも近い要素だとも言える。

処女作『揚羽蝶が壊れる時』²²に、老人、特に認知症に罹っている人物の持つ境界性を明確に示している箇所がある。

わたしは部屋中に散らばったコスモスを拾い集めた。そして、狂っているのはわたしの方かもしれないと言いつた。コスモスを両腕に一杯引き抜いてきたことを、いったい誰が異様だと決定できるのだろう。(傍線筆者)

「わたし」は祖母が突然コスモスを抱えて帰ってきた事実をどうにか受け止めようと努める。他、『沈黙博物館』・『貴婦人Aの蘇生』には目立った障碍のない、よく喋る活動的な老人が主要人物だが、こちらも理解者となる若者が必ず存在する。また、白血病の弟を「完璧」だと評する『完璧な病室』や、左腕が動かないために右腕だけで泳ぐ弟の姿に「完成された調和」を認める『バックストローク』のように、患者に完全性を見出す事例もしばしばある。

小川作品において「老」と「病」は共に、視点人物か、その傍にいる者によって受容されるものとして語られる。ただし、前期は「処女作以来一貫して〈老〉と〈醜〉とをなんら躊躇することなく等号で結んで」いるのも確かである。「病」は他者とのコミュニケーションをそれほど難くせず、むしろ当人の美しさを際立たせたり、関わる者にマージナルな世界への知見を拓かせたりする。

一方で、「老」は前期に限って言えば比較的厭う対象でありながら、視点人物たちを遠ざける要因とはならない。「〈老〉と〈醜〉とを」「等号で結んで」いる点には「老」を貶める意図はなく、ありのままの姿を描き出すリアリズムの現れが感じられる。かえって、醜いことが他者を妨げないのであれば、やはり受容の物語を読み取ることが可能だろう。肝要なのは、極めて肯定に近い許容であり、必ずしも賛同ではないことだ。

(2)食への忌避感もまた、たびたび先行論で取り上げられる論点である。小川作品に綴られている「生活」の描写で、衣食住のう

ち最も割合が高いのは間違いなく〈食〉だ。今まさに食べている食物に、虫や腫瘍などを用いてグロテスクさを喚起させるのは、もはや小川洋子の常套手段とも言える。

他方で、そのような比喻とは違った手法によって異化を試みた『シュガータイム』に着目していきたい。以下、山口の論²⁶⁾から引用する。

・かおるはどれだけ本当の「食べ物」を摂取しても食欲を満足させることができないが、記録することにより食欲を完結させることができている。(中略)食事という面において有機物である食べ物より無機物である日記及び記録が優位性を確立させているのである。

・食欲の完結のために食べたもの、あるいは食べてすらいけないものを記録することは食べ物に「無機物」と化する行為に他ならない。

右から分かれるとおり、「かおる」は結果として『完璧な病室』の「わたし」と同様に身体の「無機物」化を望んでいると言える。

論旨は少し変わるが、小川洋子の文学において、実存と認識は乖離しやすい。例えば『完璧な病室』のS医師に抱擁される場面である。

大切なのは、触れ合うことではなく包まれることだった。／
そして彼の筋肉に完全に閉じ込められた時、肉感的な孤独が
わたしを安らかにした。／——このままひっそりと無機物の

ように清らかに生きていけたらいいのに。何も変わらず、何も変性せず、腐敗せず、このままずっと弟と一緒にいられたらいいのに。⁽²⁹⁾

小川洋子のエッセイ『妖精が舞い降りる夜⁽³⁰⁾』での言及を基に「わたし」はS医師の肉体に弟を重ね合わせて見ているという指摘がしばしばあるが、越智の論⁽³⁵⁾に詳しいように、S医師は「名辞しなければならぬ程の関係はなく」、「吃音りのおかげで、他者と闘争的でない関係を結び、（中略）暖かい人間関係を結び得る」。弟・夫のように規定すべき関係性になく、弟の看病に身を尽くす「わたし」や、仕事に専念している夫のような自閉的な人柄でもない。「無機物」のようになっていく弟と、同様になれるよう望む「わたし」と比べると、S医師は「しなやかな筋肉」を持った〈生〉に溢れた人間でもある。

いわばS医師は「わたし」の対極に位置し、弟Ⅱ〈死〉に傾倒しながらも「生きていけたらいいのに」、「弟と一緒にいられたらいいのに」という〈生〉との狭間で揺れる「わたし」を唯一癒すことができる存在だ。弟や夫のような、近しい男性には「わたし」を慰めることは敵わなかったのだから。

右の場面での実存とは抱かれる「わたし」を、認識とは「無機物」への憧れを指す。ここに二律背反な「肉感的な孤独」が表出するのである。

より分かりやすい例が、『誰かが君のドアを叩いている―首にかけた指輪―・『密やかな結晶』に著されている。二作には肉体

の一部、たとえば左足を自身の身体のものとして認識できなくなる様子が描かれている。

・ みんなの言葉を信じれば、わたしの足は何の問題もなく、確かに存在しているらしいのだが、それが自分の左足だったという感覚、左足というものの概念、そういうことが分らなくなってしまったということだ。⁽³⁶⁾

・ なぜかズボンには二つ入り口があった。右足を突っ込んだあと次にどうしたらいいのか、わけが分らなくなった。物体は変わらず腰から離れる気配はなく、黙ってわたしの方をうかがっていた。⁽³⁷⁾

もちろん、実存は左足であり、認識は左足の概念そのものだ。自身の肉体が認識できない実在する症例として、失認症や離人症が挙げられるが、二作の場合は〈左足〉自体の存在からして消滅している入念ぶりである。

話を戻すが、要は〈食〉を異化する行為と、実存と認識の乖離は、相似だと指摘しよう。対象から、対象の意味するところを切り離してどれだけ距離をとることが可能かどうか、という実践のようにも見えてくる。ただし、『博士の愛した数式』においては〈食〉を厭う様子は見られず、とりわけ初期作品に集中した性質ではある。『博士の愛した数式』を転換点と呼ぶべき因子の一つではあろう。

(3) 淡泊な性的表現にまつわる評価として、小川作品は「温度が低い」「肉体」そのものに訴えてこない⁽³⁸⁾「医学的な感じがする（中略）身体というよりも「人体」⁽⁴⁰⁾」等といわれている。以下、男

と少女のSM行為を描いた『ホテル・アイリス』⁽⁴⁾から例を挙げ
る。

・両腕は手首で縛られ、背中へ回されていた。乳房はぶざまに
押しつぶされ、形をとどめていなかったが、触れてもらうの
を望むように乳首はうす桃色に染まっていた。

・染みだらけの彼の背中を、わたしはなめる。腹と皺の間に、
舌を差し込む。汗で湿った脇にも、砂で汚れた足の裏にも、
舌を這わせる。そんなすき間もないよう、オイルを塗りたく
る。

(傍線筆者)

傍線で付した少女「わたし」の願望や妄想が叶えられることは
ない。ここでも、実存(肉体)と認識(欲求)の乖離が見られ
る。少女は男に対してサディスティックなふるまいを求める以上
に、自身の肉体が醜く貶められることに快感を覚える。そのため
か男と少女の間に横臥する肉体関係には、自然と制限が設けられ
ている。鉄で衣服を切り裂いたり、縄で少女の身体を縛ったりは
するものの、男の手が直接触れるのは少女の頭を上へ向かせる時
など、そう多くはない。また、少女の側から男への接触も叶わな
い。

性的な状況を描写しながらも、肉体同士の接触は最低限に抑え
られ、あくまで二者間の関係性を繋ぐ舞台装置としての役割が与
えられているのである。

他、『やさしい訴え』⁽⁴⁾から性行為について描写した箇所を引く。

彼はわたしが望むとおりのことをしてくれた。凍りついた歓

びを一つ一つ呼びさましてくれた。服を脱ぐ間も、毛布に横
たわる時も、一瞬もわたしたちは身体を離さなかった。怯え
ているのかと思うほど優しく、彼の指は動いた。

小川作品に著される性行為のほとんどが右のように間接的な表
現であり、ともすれば実際には裸で抱擁しあっただけかもしれな
いとも読み取れてしまう。〈性〉を取りあげながらも、その匂い
や質感を削ぎ落して婉曲に仄めかすに過ぎない筆致は、エロティ
シズムを肉体から切り離している。男女間を結ぶための交流に身
体の触れ合いこそあれ、性的欲求よりも心理的な希求に重きが置
かれていると捉えられるのではないだろうか。

ただし、「(肉体)」はあり、「(性)」の行為はある。しかし両者を
結ぶ何か別の何かが決定的に欠けている。「(欲望)」あるいは
〈情念〉こそが〈肉体〉や〈性〉(中略)とを結ぶ紐帯である」と
いう小川作品全般に対する伊藤の指摘⁽⁴³⁾にあるように、『やさしい
訴え』にも〈情念〉は見受けられない。

嫉妬感情はあるものの、瑠璃子の中でその恋愛感情を自ら省
みることに、たとえば、なぜ新田を好きになったのかについて
の理由付けをしてみるとか、さらには恋愛をめぐる心理的
葛藤を起こすとか、要するにその恋を考えようとするところ
があって当然だが、それらが瑠璃子には一切無いと言っ
ていいのである。⁽⁴⁴⁾

右に加えて、綾目は『『やさしい訴え』における愛とは、恋愛というよりも性愛』と論じている。再三述べているが、小川作品上の身体の接触は得てして〈性〉から遠ざけられる。よって、視点人物・瑠璃子には恋愛感情と呼べるほどの〈情念〉はないが、新田に共に居て欲しいという欲求はある。二人の行性行為は瑠璃子の「身体」が求めているが、込められているのは心理的な繋がりへの憧れである。そのような曖昧さを孕んだ状態を、実存と認識の乖離によって小川洋子は描き出しているのである。

(4)モラトリウム状態についての言及を、『揚羽蝶が壊れる時』から抜粋する。

「前略」自分の身分を決定するのを、先に延ばしてる。だから今の自分に確信が持てないのさ。でもその不安定さっていうのは、充分心地いいものもあるんだけど。」

小川作品における視点人物「わたし／私」の女性たちの多くは「経済的に不安は無く、家族の誰のために自分の時間を犠牲にすることは無い、自己と向き合うにはこれ以上無い程恵まれた環境にある」⁽⁴⁶⁾と岡が指摘している。

決して豊かではないが、困窮している様子はない生活水準。このような環境設定は、マズローというところの生理的欲求・安全の欲求をクリアしており、生活につきまとう一定の煩わしさを物語から排除することになる。まさに、『完璧な病室』の「わたし」が有機物的な「生活」の様子を厭うのと同じように。また、夫や

それに準ずる立場の男性・子どもが不在の家庭環境は、「わたし／私」が「自分の身分」の「不安定さ」に対して存分に懊悩することを可能にさせる。

具体的な例示を挙げるのであれば、妊娠中（『揚羽蝶が壊れる時』、離婚寸前（『余白の愛』・『やさしい訴え』・『ベンガル虎の臨終』）、無職（『第三火曜日の発作』）などの一方、恋人はいるが婚前であつたり、恋人はほとんど不在のものとして語られたりする。とにかく、身分が未決定であるか、新たな身分を決定する中途に置かれている。少し過剰かもしれないが、年若い「わたし／私」（『美少女コンテスト』・『ホテル・アイリス』・『キリコさんの失敗』他）も確立された身分は無いといえよう。

小川作品において、曖昧さは肝心な要素である。冒頭や(1)でも触れたように、視点人物が曖昧な状態にあるということは「現実」と「非現実」の境界線を滲ませる。そして、双方の世界を行き来したり、橋渡しとしての役割を担ったりする。

そもそも文学上で主にいわれる〈モラトリウム〉とは多くの場合、アメリカの心理学者エリック・エリクソンが初めに提唱した「人間が成長して、なお社会的義務の遂行を猶予される期間。また、その猶予にとどまろうとする心理状態」⁽⁴⁷⁾を意味すると思われる。エリクソンの著作は一九五四年に日本語訳され、一九七一年には「モラトリウム人間」という語まで誕生しており、今や日本では広く知れ渡っている概念だといえよう。

なお、「モラトリウム人間」とは古典的なモラトリウム心理と比した時の、新しいモラトリウム心理を持つ人々を指している。

「本来のモラトリアムは、青年が、社会的現実から一步距離を置いて、その自我を養い、将来の大成を準備するという明確な目的をもった猶予期間⁵⁰」であつたのに対し、「モラトリアム人間」は以下を条件とするという。

①まだいかなる職業的約割も獲得していない。②すべての社会的かわりを暫定的・一時的なものとみなしている。③本当の自分はこれから先の未来に実現されるはずで、④すべての価値観、思想から自由で、どのような自己選択もこれから先に延期されている。⑤したがって、すべての社会的出来事に当事者意識をもたず、お客さま意識しかもとつとしない。⁵¹

小川作品の視点人物の場合、自己存在を問うための期間であるという意味からして特に③・④が該当するだろう。自分が未決定である以上、視点人物は身分に課せられる責任から解放されており、また生活にまつわる煩わしさも持たないために、ひたすらに自己へと没頭することができる。小川は、精神面の成長譚としての「小さな物語」を早々に取り上げ、くり返し著わしてきたのである。

(5)近親者の死について述べる前提として、小川作品には多くの〈消滅〉と、それに対する偏愛が描かれていることを確認したい。記憶やモノ、音や声など様々な消滅が扱われており、(2)では身体の消滅について触れたが、〈消滅〉の極致は生物の死である。『完璧な病室』の弟に始まり、祖母や父母、血の繋がりがこそないが親

しい知人やペットにいたるまで、視点人物または主要人物と関係性を持つ相手の（時には視点人物自身の）死が物語の起承転結を問わずに描きだされる。

小川作品の場合、生死の境が曖昧な状態がしばしば見られるが、結末部で任意の人物／動物がおおよそ確実に死を迎えている作品としては『完璧な病室』・『密やかな結晶』・『ホテル・アイリス』・『ベンガル虎の臨終』・『貴婦人Aの蘇生』・『ブラフマンの埋葬』⁵²などが挙げられる。これらの作品では、対象の死が描写された後は手短に物語が締めくくられる。対象の死後の顛末についてはあまり多くを要さないのである。例えば『ブラフマンの埋葬』でペットのブラフマンを亡くした際の視点人物〈僕〉は、埋葬の方法を事務的に記述するのみで死後の悲しみに暮れる様子などとは描かれずに終わっている。〈消滅〉したその後に焦点が置かれないうことは、〈消滅〉までの過程がいかに尊ぶべき時間であるかを強調し、いざ〈消滅〉を迎えてしまえば果敢なく時は過ぎ去ってしまう赴きを感じさせる。

特に『密やかな結晶』⁵³では独特の手順をもって〈消滅〉が行われるため、鈴木⁵⁴の論考から概要を見ておきたい。

・先にも見たように、「消滅」とは、「もの」それ自体の消失を意味するわけではない。／「消滅」が起こってしまったあとには、その「もの」を処分する（焼却したり、川に流したりする）ことが強制され、この処分の完遂を秘密警察が管理しているのであるが、「消滅」の時点では「もの」は失われていない。／では、何が消え去るのか。それは、その「もの」

にまつわる記憶の一切である。(中略) この時、「もの」から奪われてしまう「質」の一切を〈意味〉と呼ぶことができるだろう。

・(前略)〈意味〉を思い起こすことができなくなる。したがって、「消滅」とは、「もの」の消失であると同時に、「身体感覚」の、「記憶」の、そして「言語」の消失でもある。

『密やかな結晶』は、定期的に「消滅」(事象そのものの名称)が発生する島を舞台としている。例えば、リボンの「消滅」が起こると、まず人々はリボンをリボンとして知覚しづらくなる。次に、リボンを川に流したり、火にくべたりすることによって島からリボンの存在を徹底的に排除する。

「消滅」の対象の〈意味〉を人々が忘れてから、それぞれに物体を手放す。これによって対象は島から「消滅」する。ここに、「心(精神)」は非物体的なもの、物体から区別しうる独自のものであるという考えに発し、世界の真実在は究極において心的(精神的)なものである」とする唯心論と、「精神的・心的なもの(靈魂、精神、意識など)よりも物質的なもの(自然、物質、身体など)のほうが根源的であり、第一次的である」とする唯物論⁵⁵⁾どちらにも準拠せず、対象を徹底的に(精神と物体、双方から)排除しようとする試みが読みとれる。

まず〈意味〉を喪失する点においては唯心論的であるが、喪失した後もその対象をモノとして認識できていることから、唯物論的見地も少なからずある。唯心論に従って対象を認識できなくなる、また対象と他の事物との境界が分からなくなる、とするだけ

でも「消滅」は可能であったはずだ。しかし、物体としてのモノを島から無くすことによって「消滅」は完了とされており、明らかに唯物論のレベルにも立っている。

なお、「消滅」したはずのモノを持ち続けていたり、「消滅」の事象が個人的に発生せず記憶を保持し続けていたりすると、秘密警察に捕まってしまう。このために、人々はモノそのものも手放さざるをえない。つまり、秘密警察がいることによって「消滅」の唯物論的見地は担保されているわけである。

以上のように、「消滅」は哲学的観点では入り組んだ事象であり、ストーリーの根幹にあたる。ただし、島民の大半は「消滅」した対象に思いを寄せることはない。無論、忘れてしまったのだから当然ともいえる。しかし、記憶を失っていないごく一部の人間に「消滅」したモノを思い出すよう働きかけられたとしても、心が動くことはない。小川作品にとって〈消滅〉とは、そこに向かうまでの道程が肝要であり、起こってしまった後の人々の心の持ちようはさほど注目されないのである。

『博士の愛した数式』では直接に博士が亡くなった、とは描写されず、最後に博士の下へと訪問した〈私〉とルートの様子が描かれて締められている。おそらく、博士はその後まもなく亡くなったであろうと窺えるが、〈私〉が語るのは博士と共に過ごした日々だけで、失われた後の感慨は一切省かれている。やはり、対象の〈消滅〉までの一年にも満たない期間がいかに視点人物にとって重要であるかが分かる構成となっている。

(6)他者の偶像視について指摘しているのは、本稿の範囲(前期

と『博士の愛した数式』以降三年以内の作品」とした論述の中ではおそらく、倉田による『貴婦人Aの蘇生』内のテキスト「それぞれの胸に、彼らなりの伯母さん像を描き出し、その像に向かつて心からの祈りを捧げた」からユーリ伯母さんの偶像性を述べただけだ。初期に『完璧な病室』の弟に過度の清潔さや完全性を見出したり、『妊娠カレンダー』の赤ん坊に染色体のイメージを託したり（一個人を表すのに相応しくない、科学的な用語に置きかえている）する傾向からして、この性質は小川作品全体から読みとれるはずである。

なお、小川作品における視点人物の《傍観者／観察者》という役回りは先に松本が提唱しているが、そのように語り手の立ち位置を定めた時に表出してくる他者の偶像性についてはまだ論考が重ねられていないようである。

まず先に、「自己」の範囲を設定しておきたい。本論では原則、その人の身体と、身体に宿る自我、そこまでを一つの「自己」として見る。他者との接触・非接触によつて生ずる相対的な関係性などは別個のものとみなし、「自己」の外にあるとする。

他者とは自己以外の存在の一つであり、自己の認識によつていかにようにもイメージの変容が可能なのである。その意味では、《他者》という存在は元より偶像性を孕んでいるといつてもいい。ただし、小川作品の視点人物の抱く偶像視は一貫して、対象となる相手を貴ぶようなケースが多い。対象者はとにかく、儂げであつたりしなやかな肉体を持っていたり、視点人物の嗜好にどこか引つかる人物である。

(4)に先述したとおり、小川作品の多くがモラトリアムを経た成長譚であるならば、偶像視する対象者の人物像を目指すように思われるかもしれない。じつは、視点人物には積極的に成長しようとする気概はそれほどない。また、対象者を目標とするわけでもない。では、どのような変革が訪れるのかというと、対象者との「関係性」の構築を基に、自己を再認識する、という展開が最大の例である。

三 〈老人〉と〈子ども〉への継承

ここまで、小川洋子の前期作品における諸要素について概観してきた。これらを『博士の愛した数式』と照らし合わせてみると、以下のようなことが述べられる。(1) 病の思いは博士の記憶障碍に著されているが、(2) 食への忌避感影を潜めている。(3) 淡白な性的表現による実存と認識の乖離は、博士の一回性の記憶（実存）と、〈私〉・ルートの連続性の記憶（認識）の懸隔として語りの偏向に現れている。(4) モラトリアム状態は博士の記憶保持能力が損なわれるまでのタイムリミットとして描かれ、(5) 近親者の死、(6) 他者の偶像視はそのまま博士にまつわる項目である。

(3) 淡白な性的表現そのものがない点と、(2) 食への忌避感が見られない点は、『博士の愛した数式』が転換点たる所以である。一方で、(1) 病の思い、(4) モラトリアム状態、(5) 近親者の死、(6) 他者の偶像視のように前期と共通する要素もあるため、小川作品の持つ性質は確かに引き継がれている。

小川洋子の作家概説は宮内、作品概説は高根沢や千野、研究史

は小柳や山崎^⑧の論究に詳しいため、参照されたい。また、本稿をふまえて、『博士の愛した数式』以降三年以内の作品の中から〈老人〉と〈子ども〉に主眼を置き、二者間に育まれる関係性のプロセスと実相については別稿を期したい。

注

- (1) 小川洋子『博士の愛した数式』（新潮文庫、二〇〇五年十二月）
- (2) 伊藤氏貴「特集・小川洋子 存在と非存在の間のためらい——小川洋子の愛した数式」『ユリイカ』三六卷・二号、青土社、二〇〇四年二月。
- (3) 井辻朱美「『大きな物語』の解体——小川洋子の微分方とフアンタジーの積分法——」『ユリイカ』三六卷・二号、青土社、二〇〇四年二月。
- (4) 濱崎晶弘「『まぶた』——孤高なる〈者〉と出会う前——」『現代女性作家読本② 小川洋子』鼎書房、二〇〇五年一月。
- (5) 綾目広治『小川洋子 見えない世界を見つめて』勉強出版、二〇〇九年一〇月。
- (6) 佐藤聡美「小川洋子論——金光教との関わりを中心に——」『清泉語文』三号、清泉女子大学日本語日文学会、二〇一二年三月。
- (7) 水牛健太郎「魔術としての数学」——『博士の愛した数式』を巡って——『群像』六一卷・六号、講談社、二〇〇六年六月。
- (8) 前掲、注2に同じ。
- (9) 小川洋子「美少女コンテスト」『刺繍する少女』（角川文庫、一九九九年八月）
- (10) 小川洋子「キリコさんの失敗」『偶然の祝福』（角川文庫、二〇〇四年六月）
- (11) 小川洋子「刺繍する少女」『刺繍する少女』（角川文庫、一九九九年八月）
- (12) 小川洋子「失踪者たちの王国」『偶然の祝福』（角川文庫、二〇〇四年六月）
- (13) 小川洋子「バックストローク」『まぶた』（新潮文庫、二〇〇四年一月）
- (14) 小川洋子「完璧な病室」『完璧な病室』（中公文庫、二〇〇四年一月）
- (15) 小川洋子「ホテル・アイリス」『幻冬舎文庫、一九九八年八月』
- (16) 小川洋子『貴婦人Aの蘇生』（朝日文庫二〇〇五年二月）
- (17) 前掲、注2に同じ。
- (18) 高橋英理「小川洋子の記憶」『ユリイカ』三六卷・二号、青土社、二〇〇四年二月。
- (19) 小川洋子『シュガータイム』（中公文庫、一九九四年四月）
- (20) 小川洋子『妊娠カレンダー』（文春文庫、一九九四年二月）
- (21) 山口由莉「小川洋子『シュガータイム』における食と病」『富山比較文学』第二期・第二集、二〇一九年二月。

- (22) 高木佐和子「小川洋子『まぶた』論——物語と視差——」
『富山大学日本文学研究』四卷、富山大学人間発達科学部日本文学会、二〇一八年七月。
- (23) 小川洋子「揚羽蝶が壊れる時」『完璧な病室』（中公文庫、二〇〇四年二月）
- (24) 小川洋子『沈黙博物館』（ちくま文庫、二〇〇四年六月）
- (25) 前掲、注2に同じ。
- (26) 平林美都子「女性と「食」…『シュガータイム』の性のない世界」『日米女性ジャーナル』通号一五、城西大学国際文化教育センター、一九九三年二月。
- (27) 大塚常樹「小川洋子『妊娠カレンダー』」『國文學…解釈と教材の研究』三七卷・一一号・臨時増刊号、學燈社、一九九二年九月。
- (28) 前掲、注21に同じ。
- (29) 前掲、注14に同じ。
- (30) 小川洋子「妖精が舞い降りる夜」（角川文庫、一九九七年九月）
- (31) 山口哲理「LIVRES 今月の本」小川洋子『完璧な病室』を讀む」『Marie claire japon』通号八七、中央公論社、一九九〇年二月。
- (32) 松本和也「記憶／忘却のための場所——小川洋子「完璧な病室」」『現代女性作家論』水声社、二〇一一年九月。
- (33) 原口真智子「書評消滅する「わたし」小川洋子『密やかな結晶』」『群像』四九卷・三号、講談社、一九九四年三月。
- (34) 前掲、注5に同じ。
- (35) 越智悦子「『完璧な病室』——閉じた世界と開かれた世界——」『岡大國文論稿』一九卷、岡山大学言語国語国文学会、一九九一年三月
- (36) 小川洋子「誰かが君のドアを叩いている——首にかけた指輪——」『アンジェリーナ』（角川文庫、一九九七年一月）
- (37) 小川洋子『密やかな結晶』（講談社文庫、一九九九年八月）
- (38) 前掲、注3に同じ。
- (39) 前掲、注2に同じ。
- (40) 布施英利「脳の中のブンガク」5・小川洋子の「人体」『すばる』一八卷・二号、集英社、一九九六年二月。
- (41) 前掲、注13に同じ。
- (42) 小川洋子『やさしい訴え』（文春文庫、二〇〇四年一〇月）
- (43) 前掲、注2に同じ。
- (44) 前掲、注5に同じ。
- (45) 前掲。注23に同じ。
- (46) 岡友美「小川洋子論——「違和感」——について」『湘南文学』三三卷、東海大学文学部日本文学科、一九九九年三月。
- (47) 小川洋子「ベンガル虎の臨終」『寡黙な死骸みだらな吊い』（中公文庫、二〇〇三年三月）
- (48) 小川洋子「第三火曜日の発作」『刺繍する少女』（角川文庫、一九九九年八月）
- (49) 新村出編「広辞苑第五版」岩波書店、一九九八年二月。
- (50) 小此木啓吾「モラトリアム人間の時代」中公文庫、一九八一

年十一月。

(51) 前掲、注50に同じ。

(52) ジャン・F・リオタールが「小さな物語」を使用した『ポストモダンの条件 知・社会・言語ゲーム』は一九七九年出版、一九八六年日本語訳。小川の処女作「揚羽蝶が壊れる時」の発表は一九八八年。

(53) 小川洋子『ブラフマンの埋葬』（講談社文庫、二〇〇七年四月）

(54) 鈴木智之「アンネ・フランクを想起想像する…小川洋子『密やかな結晶』、あるいは「消失」にさらされる生」『社会志林』六四巻、法政大学社会学部学会、二〇一八年三月。

(55) 下中邦彦編「哲学事典」平凡社、一九七一年四月。

(56) 前掲、注16に同じ。

(57) 倉田容子「ファンタジーとしての〈古い〉——小川洋子『貴婦人Aの蘇生』と梨木香歩『西の魔女が死んだ』』『文化表象を読む——ジェンダー研究の現在——』お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア、二〇〇八年三月。

(58) 前掲、注32に同じ。

(59) 宮内淳子「小川洋子」『國文学…解釈と教材の研究』四四巻・三号、學燈社、一九九九年二月。

(60) 高根沢紀子「小川洋子」『現在女性作家研究事典』鼎書房。二〇〇一年九月。

(61) 千野帽子「小川洋子著作解題」『ユリイカ』三六巻・二号、

青土社、二〇〇四年二月。

(62) 小柳しおり「小川洋子 主要参考文献」『現代女性作家読本

② 小川洋子』鼎書房、二〇〇五年十一月。

(63) 山崎眞紀子「研究動向 小川洋子」『昭和文学研究』第七一集、昭和文学会、二〇一五年九月。

（おおいで・ひろか 本学大学院修士課程）